

## 年間第 27 主日 マタイ 21 : 33~43 善意の管理者としての私たち (私たちの生活)

先日、中山あづささんが美味しい葡萄を届けてくださいました。聖書の中で、ブドウには特別な意味がこめられています。ブドウの木がイエスのたとえられることもあります。最後の晩餐では、ぶどう酒がイエスの血に変わります。今日取り上げられている「ブドウが実を結ぶ」とは、「救いが与えられること」を意味します。逆に取り上げられるとは、「救われないこと」を意味しています。

今日の福音で登場する、農夫たちはユダヤ教の指導者です。彼らは、神様から遣わされた預言者たちを受け入れませんでした。(34~36 節)。神様は最後に、ご自分の子を遣わしましたが、イエスも殺してしまいました。(37~39 節) 42 節からのイエスの言葉、「捨てた石が隅の親石になった」とは、ユダヤ人が殺したイエスを、神が復活させて、救い主とされたことを意味しています。つまり、今日の朗読箇所は、「救いの歴史」をダイジェストで語っています。

では、今日の福音から私たちは何を学ぶのでしょうか？ 私たちは、農夫たちのように毎日の生活を神様から託されています。私たちのいただいているもの、才能、時間、お金、経験などすべては、神様からのもの、神様からの賜物です。けれども、農夫たちは大きな勘違いをしました。農夫たちは、ブドウ畑も収穫も自分のものにしたくなって、神様から遣わされた僕やイエスを強盗でも殺すように殺してしまいました。ここまで極端とまでいかなくても、私たちも同じような過ちをしてないか注意が必要です。私たちの仕事、生活は神様から託されているものに過ぎません。自分の好きなようにしていい訳ではありません。キリスト者の私たちは、このことをいつも意識することが大切です。

仕事をして給料をもらう、家族を養う、子どもを育てる、どれも大変な仕事です。でも、もともとは、すべては神様から託されたものです。このことをよくわきまえましょう。私たちは神様から創造の協力者として招かれています。ブドウ畑やブドウと同じように、仕事や家庭といった創造の賜物を正しく活用するように期待されています。

創造の賜物を正しく活用するかどうかで、“神からの救い”が実現する、しないが決まってきます。私たちが、毎日の生活でブドウ畑を託されているということは、イコール神の国の建設が私たちにかかっているということです。この意識を深めましょう。

自分が楽しい、苦しいだけじゃなくて、神様から託されている感覚を呼び起こしましょう。時に私たちは、そのために苦勞を背負うかもしれませんが、それでも、そこが勝負どころです。力不足を感じたら、主に助けを求めましょう。自分の計画より神様の計画を優先させているなら、必要な助けは必ず与えられます。この信仰を持ちましょう。私たちが、神様から託されているブドウ畑を忠実に世話すれば、周りの人たちに“神の国”が伝わります。神様の計画、思いが伝わります。

農夫たちが犯した過ちをしていないか？ 心の中をみましよう。そして神様の忠実なしもべとして、歩んで行きましよう。